

主 題：主に喜ばれる歩みと罪との戦い

聖書箇所：ヘブル人への手紙3章12－13節、随所

テーマ：日々の信仰生活にあって、“罪の恐ろしさ”を知っている者にふさわしい歩みをしているか？

今朝、皆さんとみことばを見るにあたって、初めに全員に考えてほしいことがあります。いま一度、それぞれ自分自身に問いかけてみてください。一つの質問です。私たちは日々の生活の中で、実際に、どれほど「罪の恐ろしさ」を覚えて歩んでいるのでしょうか？ただの知識としてではありません。「罪は危険なものですか？」と問えば、ここにおられる多くの方が「もちろん、そうです」と答えられるでしょう。聖なる神様が罪を忌みきらっておられることをご存じの皆さんは、そのような罪から離れることが主に喜ばれる歩みに欠かせないと、当然のように考えておられることでしょうか。でも、実際の歩みはどうでしょうか。果たして私たちの日々の生活は、そんな罪の恐ろしさを知っている者にふさわしい歩みでしょうか？非常に危険なものだとわかっているからこそ、そこから何とかして離れたいと望んで、罪と格闘しながら毎日を歩んでいるのでしょうか？それとも、実際はまるで大したことのないもののように罪を扱い、そのまま放置していても何の問題もないかのように歩んではいないのでしょうか？

かつて「信者の中に住み着く罪」という本を記したジョン・オーウェンという人物は、その本の中でこんなことばを残していました。「罪は私たちの魂の内にいつも残っており、決してなくなることはありません。使徒は二度にわたって『私のうちに住む罪です』と述べました。もし、罪が時々訪れる訪問客であるなら、立ち入らせず、対処することもできるかもしれません。しかし、魂が罪の家なのです。あなたが何をしようとして、そこにいつも罪はいます。誰かといるときも、一人のときも、夜も昼も、罪は共にいるのです。…ああ、どれほどの人がこの決してなくなることのない、生まれつきの敵について考えていないことでしょうか。クリスチャンだと告白する者の用心深さは、どれほど実際の罪の危険性に見合ったものでないことでしょうか。」と。自分自身の歩みをよく振り返ってみてください。私たちは本当に罪の深刻さを知っているのでしょうか？そしてもし「知っている」と言うなら、それにふさわしい注意を払っているのでしょうか？

先々週のことを少し思い返してみてください。私たちはコロサイ人への手紙を通してパウロの祈りを一緒に考えました。主に喜ばれる者としてますますコロサイの兄弟姉妹たちが成長し続けていくことをパウロは願っていたのです。そしてその成長に欠かせない要素の一つとして挙げられていたものは、「主にかなった歩みをしていくこと」でした。パウロは、もうすでに忠実に歩んでいた兄弟姉妹たちが、継続してほかのだれでもない主イエス・キリストに似た者となっていくことを祈っていたのです。自分たちが勝手に考える目標ではありません。主にふさわしい者として成長していくということ、それこそがすべての信仰者にとって欠かせない歩みなのだ学びました。そしてもちろんそれは、今を生きる私たちにとっても同じでした。私たち自身も、愛する主の姿と自分自身の姿を比べて、キリストに似た者へとますます変えられていくことを目指していくのです。いつの日か必ず主にお会いすることを楽しみにしながら、その日がやって来るまで、キリストが清くあられるように自分を清くしようと忠実に歩んでいくのです。でも同時に、そんな歩みが容易なものではないことを私たちはよく知っています。主に喜ばれる者として成長していきたいと願っていても、そこには必ずさまざまな困難や戦いが待ち受けているのです。では、いったい何が一番の問題なのか？…私たちは、私たちのうちに住みつく罪と戦い続けなければならないのです。確かに救われた者はみな、もうすでに罪の奴隷からは解放されました。神様の恵みによって、キリストによって、新しく生きる者へと変えられました。かつて罪を愛して

罪に支配されていた者たちがその罪を憎んで、神様を喜ばせたいと願う者へと造り変えられたのです。しかしこれは何も、罪との戦いがなくなったことを意味しているのではありません。

思い返してみれば、パウロもはっきりと言っていました。ローマ6：6で「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」と述べた後で、彼はこう口にしていたのです。ローマ7：18－20に「:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。:19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。:20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」と。忘れてはいけないことは、これらのことばは、救われて間もないパウロが口にしたことばではないということです。少なくとも約二十年もの信仰生活を経た後で、彼はここに自分の苦悩を記していました。あのパウロでさえ、自分の罪との戦いに苦しみ続けていたのです。主に喜ばれる者として成長したいと強く願いながらも、それを妨げようとする自分の罪と格闘していました。彼は自分のうちにある罪の恐ろしさをよくわかっていたのです。

では皆さん、私たち自身は、いったいどれほど罪の危険性を覚えて、そこから熱心に離れようとしているでしょうか？先々週皆さんと、主にかなった歩みをするを学んでから、この二週間、私自身もこの点に関していろんなことを考えさせられました。そしてどうしても、この罪の持っている危険性について、改めてみことばから見なくてはならないと思わされたので、そのことをきょうは皆さんと一緒に考えてみたいと思います。きょうはコロサイではなくて、ヘブル3：12－13を中心に、さまざまな聖書のことばを見ていきたいと思えます。特に二つの点「罪の恐ろしさ」と「その罪に対する対抗策」について、神様が教えてくださっていることを一緒に心に留めてみましょう。この時間が、皆さんの信仰の励ましと助けになることを心から祈っています。では、さっそくみことばを見てみましょう。

ヘブル3：12－13

「:12 兄弟たち、あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がいないよう気をつけなさい。:13 「きょう。」と言われていた間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」

1. 現実の問題：罪の恐ろしさ ヘブル3：12

さて、まず初めに皆さんと考えたいこと、それは「罪の恐ろしさ」です。みことばは、現実の問題として、罪が非常に危険なものである、ということを示していました。ヘブルの著者は12節でこのように命じていましたね。「兄弟たち…気をつけなさい」と。ここで「気をつけなさい」と訳されていることばですが、これにはもともと「何かを見ること」もっと言えば「何かを注意深く見ること」また「細心の注意を払うこと」そのような意味が含まれています。要するに「気をつけなさい」ということばは、ただぼーっと眺めるのではなく、慎重に用心深くあることを表しているのです。イエス様もこれと同じことばを用いてこのように言われました。ルカ21：8「イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私がそれだ』とか、『時は近づいた』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。」と。よりはっきりと読み取ることができるかと思えます。「惑わされないように気をつけなさい」と言われたとき、イエス様は弟子たちがいろんなものに惑わされるのではなく、だまされるのではなく、しっかりと見極めることを求めておられました。間違っただけのもの数多く出て来るその中であって、「細心の注意を払って用心していなさい」と教えておられたのです。12節でヘブルの著者が兄弟たちに向かって「気をつけなさい」と言ったのは、それと同じことでした。同じように主を愛する信仰者を含め、手紙の読者たちが「あることに細心の注意を払って用心深くしているように」と強く警告していたのです。

では、その「あること」とはいったい何なのか？こう書いていましたね。「兄弟たち、あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」「悪い不信仰の心になって生ける神から離れてしまうこと」それが、著者が懸念していた大きな危険でした。それこそが、「罪の持っている恐ろしさ」なのです。でも具体的にこれは何を意味しているのでしょうか？そのことをこれから考えてみますが、その前に一つのことばによく注目してみてください。12節をもう一度よく見ると、ヘブルの著者は単に「兄弟たち、悪い不信仰の心になって、離れないように気をつけなさい」とは言っていませんでした。彼はこう述べていました。「兄弟たち、あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって」「あなた方の中では、だれも」と言っていたのです。つまり、悪い不信仰の心にならないように気をつけるべきなのは、一部の人ではない、一部の人だけに警告が与えられているのではないということです。著者の警告を耳にした者たちはすべて例外なく、どんな人であろうとも、注意を払わなくてはならないということです。今このみことばを見ている私たちも同じです。著者の警告に当てはまらない人はここに一人としていません。だからこそ、私もあなたも自分のこととしてよく考えてみなくてはならないのです。すべての人が悪い不信仰の心になって生ける神から離れてしまうという、そんな危険性を持っているのです。では、具体的に「悪い不信仰の心になって生ける神から離れる」とは何を意味しているのでしょうか？

a) “悪い不信仰の心”

まず「悪い不信仰の心になって」とありました。ここで特に「不信仰」と訳されていることばですが、これは文字通り「信仰」の反対、「信仰」の対義語となるものです。そしてこれにはもともと「ほかの人のことばや行動に、みずからの意志で自分をゆだねようとしない」という意味が含まれています。つまり「不信仰」というのは、ある人が受け身的に、何かを信じないという選択に流されているような様子を表すのではなくて、「その人がみずから進んで信じないという決断をすること」を表しているのです。たとえだれかが正しいことを言っても、それをみずからの意志で聞き入れようとしない、真理を目の前に示されたとしても、それを喜んで信じ受け入れようとしない、というようにして、「みずからの意志を持って神様を拒むような「不信仰」「悪い心」に決してならないように」と著者は読者に警告していました。

またこの「不信仰」という問題が、あまりにも深刻なものであるからこそ、聖書の中を見ても、繰り返しいろんなところでそれが扱われているのを見て取ることができます。このヘブルの文脈を見てもそうですが、その「不信仰」こそ、かつてのイスラエルの民が抱えていた問題でもありました。モーセに率いられてエジプトを出たイスラエルの民たちはその後、何度も何度も何度も神様を信じようとはしませんでした。神様のことばに聞き従うのではなくて、その時の状況や自分たちの思いに従って、それを拒んでいたのです。約束の地に入る直前もそうでした。彼らは神様に信頼することよりも、自分たちが目にした敵の強大さに恐れを抱いて、そこに入って行くことを拒みました。そのときの様子がこう描かれています。民数記13：27-28「：27 彼らはモーセに告げて言った。「私たちは、あなたがお遣わしになった地に行きました。そこにはまことに乳と蜜が流れています。そしてこれがそのくだものです。：28 しかし、その地に住む民は力強く、その町々は城壁を持ち、非常に大きく、そのうえ、私たちはそこでアナクの子孫を見ました。」飛んで30-31節「そのとき、カレブがモーセの前で、民を静めて言った。「私たちはぜひとも、上って行って、そこを占領しよう。必ずそれができるから。」：31 しかし、彼といっしょに上って行った者たちは言った。「私たちはあの民のところに攻め上れない。あの民は私たちより強いから。」」イスラエルの民は、神様ではなく、人を恐れました。彼らは約束の地に入るその道中、何度も何度も神様の力強いみわざを目の当たりにし、その偉大さを知っていました。知らなかったわけではありません。彼らは何度も神様のすばらしさを目にしていたのです。しかしそのような神様に、彼らはみずからの意志で従うことを拒んでいました。だからこそそんな民に対して神様はこのように言われました。民数記14：11

「【主】はモーセに仰せられた。「この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしがこの民の間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか。」と。こうして主に従ったカレブとヨシュアを除くイスラエルのすべての民は、その不信仰のゆえに約束の地に入ることはできませんでした。みずからの意志を持って神様を拒む「不信仰」、これは非常に深刻な問題だったのです。

そしてもちろん、これは私たちにとっても同じです。でもこれを聞いてある人は、このように考えるかもしれません。…私は神様のことばにみずからの意志を持って逆らうことなど、そんなことはしません！罪を犯してしまうことはありますが、でも神様を信じないなんてことはありません！と。でも、本当にそうでしょうか？自分自身の歩みを考えてみてください。私たちが罪を犯す時、「これぐらいのうそだったら、神様の前に何の問題にもならない。」「こんな小さなだれも傷つけないようなら、神様も赦してくださる。」と自分に言い聞かせてうそをついたり、「陰口やゴシップをするのは確かに間違っているけれど、でも『ここだけの話』と内緒にさえすれば別に何の問題もないだろう」と自分に言い聞かせて隠れてうわさ話をしたり、「不品行はもちろん悪いものだけれど、でも周りのみんなも普通にそうしているから、性的なものをネットで調べるぐらいなら大丈夫だろう。」そう自分に言い聞かせて、本来見るべきでないものを見ていたり…。多くの場合、私たちは最初からいきなり大きな罪を犯すわけではありません。でも、これらの小さなものに見える行為が、実際に何をしているかわかりますか？それは、聖書を通して神様が教えていることを知っていながら、私たちが心の中でそれらに対して「NO!」と言い始めているのです。考えてみてください。聖書ははっきりと、主の忌みきらうものとして「偽りの舌」（箴言6：17）を挙げていました。「うわさ話」（Iテモテ5：13）をすることも、「情欲」を抱いて女性を見ること（マタイ5：28）も、はっきりと「罪」であることを教えていました。それだけではありません。それ以外のものであっても、みことばの中で神様はご自身のみこころを明らかにされているのです。私たちはそれを知っています。でも、自分の思いや置かれた状況によって、心の中で、みずからの意志で、それらのことばがあたかも存在していないかのように扱い始めるのです。神様のことばを目の当たりにしても、それをそのまま信じ受け入れることを拒絶するのです。そして、人が小さな罪に思えるものを重ねていけば、それをそのまま放置していけばどうなるか？その罪は、やがてその人の心をかたくなにします。大きな罪へと繋がることもあります。自分の罪を、大したことのないものだと考えたり、正当化したりして、心から悔い改めることを拒絶するようになるのです。だからこそ、間違いなく「不信仰」は深刻な問題でした。

b) “生ける神から離れる”

でも、同時にここで言われていたことは、「悪い不信仰の心にな」ることだけではありませんでした。もう一度ヘブルに戻って3：12の続きを見るとこう書いていました。「生ける神から離れる者がいないように気をつけなさい。」ここでヘブルの著者が言わんとしていたことは非常に厳しくて、また同時に確かな現実として存在することでした。どういうことか？簡潔に言えばこういうことです。表面上は従っているように思えたとしても、みずからの意志で生ける神様に逆らい、その神様から離れていく者がいるということです。「生ける神様を見捨てて、みずから離れていく者が実際にいるのだ」と警告しているのです。それが実際の問題としてあるからこそ、著者は「気をつけていなさい」と教えているのです。もちろん、絶対に勘違いして欲しくないのは、ここで著者が、救われている者が救いを失う可能性があるという話をしているのではない、ということです。皆さんもよくご存じのとおり、聖書はそんなことを教えてはいません。思い返してみればイエス様もこのように言われています。ヨハネ10：27-29「：27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。：28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。：29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」と。はっきりと書かれています。

した。キリストの羊とされた者たちは、神様のうちにあつて守られているのだと。すべてにまさつて偉大な父なる神様、また子なる神様、その御手のうちから羊を奪い去ることのできるようなものは何一つとして存在しないというわけです。救いを与えてくださるのも神様であつて、救われた者を最後まで守り導いてくださるのも神様でした。私たちはその真理に、いつも揺らぐことなく確信を置いて歩むことができるのです。ほかのだれでもない神様が守っていてくださるからこそ、真に救われた者がその救いを失うことなど、決してありえないのです。

そうだとすれば、「生ける神から離れてしまう者」とは、いったいどんな人物のことを言っているのでしょうか？それは、そもそも初めから本当の救いを持っていなかった人物のことです。この人物は、初めからキリストを本当には知らなかつたので、最初は熱心に歩んでいたとしても、時が来れば罪によって心がたかくなになり、信仰を捨ててしまうのです。Iヨハネ2：19にもこう記されておりました。

「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかつたのです。もし私たちの仲間であつたのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかつたことが明らかにされるためなのです。」確かに、初めはキリストへの信仰を告白し、バプテスマを受け、教会のメンバーとなるだけでなく、聖書を熱心に読んで、罪と戦い、ほかの人に伝道しているかもしれません。だれが見たって、私たちの仲間のように見える人かもしれません。しかし本当にキリストを知らなければ、その人のうちに本当にキリストがいなければ、その歩みは次第に、信仰とはかけ離れたものになっていきます。それはすぐに現れるものでないかもしれませんが。何十年もの間、表面上はクリスチャンのように生活しているかもしれません。しかし次第に、罪によって心がたかくなになって、神様に従うことよりも罪を愛するようになり、神様に従うことよりもこの世の楽しみに心が奪われるようになるのです。もう一度言いますが、救われている人がその救いを失うことは、絶対にありません。でも、その信仰が本物でないのなら、その人は時が経てば生ける神様から離れていってしまうのです。そしてもし私たちが、自分は救われているとただ思い込んでいるだけなら、その最後は言い表すことのできないほどの悲劇でしかありません。イエス様はこのようにはっきりと言われておりました。マタイ7：21から「：21 わたしに向かつて、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。：22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』：23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども、わたしから離れて行け。』」想像してみてください。私たちが「よくやった忠実なしもべよ。」と言われることを疑うこともなく主の前に立つ時に、「わたしはあなたを全然知らない。」「わたしから離れて行け。」と言われたなら…どうでしょう？そこでどれだけ嘆いたとしても、もう手遅れなのです。愛する皆さん、ヘブルの著者は現実の問題を示していました。本物の信仰者であろうと、不信仰という罪との戦いを経験します。それによってひどく苦しんで敗北してしまうこともあります。また時に罪によってだまされて、自分は救われていると思ひ込んでしまう人もいます。次第に罪によって心がたかくなになって、悲しいことに生ける神様から離れて行ってしまうことが、現実の問題として教会の中で起こっていたりするので。罪は、これほどまでに危険なものでした。

2. 罪への対抗策：互いに励まし合うこと ヘブル3：13

私たちはこのような罪から離れて、キリストに似た者へと変わり続けていくことが求められるのです。そのためにはもちろん、罪に惑わされないようにそれぞれが自分の信仰をいつも吟味していくことが欠かせません。私たちが神様に祈り助けを求めていくことは、当然大切なことです。でも、自分自身の弱さや無力さを知っている私たちだからこそ、思いませんか？…罪深い私一人では、そんな歩みをしていくことはできない。いろんな誘惑に陥ってしまって、さまざまな罪によって敗北し、だまされている

ことにさえ気づきにくいそんな私が、自分一人で歩いていくことなどできない…と。その通りです。だからこそ罪の恐ろしさを知っていたヘブルの著者は、その罪に対する対抗策として続けてこのように言うのです。13節をよく見てください。「「きょう。」と言われてる間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」と。何と言われていました？だれ一人として不信仰な心になって、生ける神から離れるような、そんな悲しいことが自分のうちにも、またほかの人のうちにも起こらないために求められていたのは、「私たちが互いに励まし合うこと」でした。それこそが、あわれみ深い神様が私たちに対して、危険な罪に対しての対抗策として与えてくださったものだったのです。皆さん、よくみことばが言っていることを自分のこととして考えてみてください。兄弟姉妹は、罪に惑わされないように、互いに励まし合いながら、ともに歩いていくことをするわけです。

ここで用いられていた「励ま」すということばには、「だれかの傍にやって来てその人を慰めること」「元気づけること」「力づけること」「励ますこと」そのような意味が含まれています。確かに私たちは自分一人だと絶え間ない罪の誘惑に、罪との戦いによって心が惑わされて、目を留めているべきその真理を忘れてしまうことがあります。だからこそ、いつも自分に真理を語り、励ましてくれる兄弟姉妹が必要になるのです。例えば、自分には理解できない、先の見えない暗闇の中に置かれて、神様を忘れ、恐れや不安を抱いてしまうことがあるかもしれません。そんなときにやって来て、「大丈夫だ。私たちの神様はいつも忠実で、いつも真実で、すべてのことを支配されているあわれみ深いお方なのだ。」とそう思い出させ続けてくれるそんな兄弟が私たちには欠かせません。自分の罪深さに打ちのめされて、一切の希望を見出せなくなってしまうようなことがあるかもしれません。でもそんなときにやって来て、「私たちの救い主は、どうしようもない罪人のためにご自身のいのちを捨ててくださったのだ、私たちの罪はすべてもうすでに十字架の血潮によって洗い流されたのだ。」とそう慰め続けてくれるそんな姉妹が私たちには欠かせません。また、信仰のゆえにさまざまな試練や迫害を経験して、その信仰を捨ててしまいたいというような誘惑に駆られることもあるかもしれません。でもそんなときにやって来て、「義のために迫害されている者は幸いなのだ。天で待っている報いは大きい。だから最後まで一緒に走り続けよう。」とそう励まし続けてくれる信仰の友が私たちには欠かせません。私たちの歩みには、主がどれほど偉大なお方なのか、救いがどんなに値しない恵み深いものなのか、キリストとの交わりがどれほどすばらしいものなのか、そんな希望や約束にいつも心を留め続けることができるようにと、互いに励まし合っていくことが欠かせないのです。必要だと思いませんか？

でもそれと同時に、この「励ま」すということばには、「戒める」とか「さとす」という意味もあるのです。言い換えれば、兄弟姉妹というのは、励まし合っていくだけではなく、過ちや罪を見出すなら、お互いに戒め合うことも求められているということです。ある時、ほかの兄弟が誤った道に進み始めているのを目の当たりにするかもしれません。ほかの姉妹がかたくなに罪を悔い改めようとしない姿を目にするかもしれません。信仰の友が信仰を捨てて離れていこうとするかもしれません。そんなときには、その人の最善を願うからこそ、私たちは愛を持って間違いを正してあげようとするのです。「あなたがしていることは、本当に主の前に喜ばれるものですか？よく考えてください。」「罪に惑わされてはいけません。自分の罪を認めて、心から悔い改めてください。」「どうか、福音を思い返してください。罪を正しく扱って、キリストに立ち返ってください。」と。こうした愛とあわれみを持って戒めるということも、それぞれの歩みには欠かせない大切なことなのです。でも、これはまた逆も然りです。どういうことかと言うと、もしだれかがあなたのところにやって来て、自分のうち間違いや過ちを教えてくれているのなら、その声に注意深く耳を傾けることが重要だということです。確かに簡単なことではないかもしれませんが。私たちは自分の弱さを聞きたくないすぐに思ってしまう。しかし、もしその人が愛のゆえに自分に語ってくれていて、自分には見えていない部分に気づかせてくれようとしているのなら、その忠実な働きを主に感謝して、そのことばを喜んで受け入れることです。

皆さん、罪の持つ恐ろしさは、現実の問題としてあります。罪に惑わされて、不信仰に陥って、生ける神から離れるという危険は、確かなものとして存在しています。だからこそ、私たちはともに集って、互いに励まし合い続けていくことです。自分だけの問題ではありません。私たちの愛している者たちが、だれ一人として罪にだまされて、かたくなになってしまわないように、互いに福音を語り、いつもキリストを覚え続けられるようにと日々助け合っていくのです。ヘブル10：24－25にこう書かれています。「:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」皆さん、私たちが集まるときには、この目的のために集まるのです。もちろんお互いの近況や世間話をする 것도間違っ てはいけません。でも、私たちがともに集うときに、互いの信仰を確認し合うということを、絶対に忘れてはいけません。それぞれはだまされてしまうことがあります。だから兄弟姉妹が励まし合って、罪に惑わされないようにと歩んでいくのです。

どうですか？私たちが自身の歩みはどのようなものでしょう？果たして私たちは罪の深刻さを正しく理解して、今それにふさわしい歩みをしているのでしょうか？それとも、ただことばや知識としてだけで、実際は罪を軽く扱っていないのでしょうか？またもし、「罪は本当に恐ろしいものだわかっている」と言うのなら、みずから進んで、互いに罪に陥らないように励まし合っていこうとしているのでしょうか？忘れてはいけません！罪は、私たちがだまそうとします。罪は、まるでキリスト以外に満足があるかのよううそをついて、私たちが誤った道に進ませようとしてします。現にキリストを知るまでの私たちは、ずっとそれにだまされ続けていたのです。罪の危険を私たちはよく知っています。罪は私たちが盲目にし、小さな罪を重ねたとしても何の問題もないかのように欺こうとします。でもそこにはいつも大きな危険があるのです。だからこそ私たちに、罪にだまされていないかを教えてくれる、そんな兄弟姉妹の助けがなくてはならないのです。皆さん、私たちに互いが互いが必要です。たった一人で信仰生活ができるわけではありません。もちろんみことばをそれぞれが学んで、あわれみ深い神様の助けを祈り求めることができます。それぞれが信仰の吟味をすることも欠かせないものです。しかし、私たちが恵みによって罪から救い出してくださったその神様は、恵みによってほかの兄弟姉妹を私たちに与えてくださいました。同じように主を愛して、同じように罪を忌みきらう、そんな神の家族を、教会を、与えてくださったのです。そうであるなら、日々励まし合って、愛する者たちがだれ一人として罪によってかたくなにならないように、ともに歩んでいくことです。確かに、罪を互いの間で告白することには難しさを覚えてしまうことがあります。素直に打ち明けるといふことに戸惑いやためらいを覚えてしまうこともあるでしょう。さまざまな犠牲を払うことになるかもしれません。でもたとえそうであったとしても、愛する者が不信仰に陥って生ける神様から離れてしまうという、そんな悲しい現実があることを覚えるのなら、そんなことが起こらないように、互いに真理を語り合いながら歩んでいくことです。

キリストにあって忠実に生きようとする者は間違いなく、この世にあって罪との戦いを経験します。最初に見たパウロでさえ同じでした。二十年経った後であっても、彼は罪との戦いを経験し続けていたのです。しかしそんな彼も、この地上でのレースを終わりまで忠実に走り切りました。そして、その彼が記した最後の手紙でこう言い切っていました。Ⅱテモテ4：7－8を見てみるとこう書かれています。

「:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。」と。パウロはこうして天に目を向けて、自分に待っている報いを楽しみにしていました。忠実に歩んだ者に用意されている主の祝福を確信していました。でも、彼のことはこれで終わったわけではありません。これには続きがありました。8節に「…私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と。これが、聖書が与えてくれていた約束でした。確かに今、私たちは日々の生活の中で罪や試練などさまざまな困難を経験します。それに敗北して心が沈むこともあります。私たちは自分

の罪深さをいつも見ます。でも私たちの歩みはそこで決して立ち止まらないのです。罪の中に死んでいたその私たちを生かしてくださり、新しい者へと造り変えてくださったお方、救い主イエス・キリストの栄光を証しする者として私たちは罪をますます脱ぎ捨て、救い主イエス・キリスト、この主に似た者へと成長していこうとするのです。そして、そのときに自分自身の罪深さを覚えるなら、改めて主の恵み深さを思い起こすことです。…自分は気付いていなかったけれど、でもこんなにも愚かで罪深い自分に対して、主はあわれみを示してくださったのだと。皆さん、私たちが罪を知れば知るほど、本来自分には絶対に値しない救いを、神様はただ恵みによって与えてくださったのだと知るのです。もちろんそんな私たちが自分の力で何かできるわけではありません。だからこそ、私たちはいつもキリストの福音に立ち返って、主の助けに拠り頼みながら、最後まで走り切っていくことです。そしてこのように忠実に走り切った者には必ず、天にあって義の栄冠が用意されているのだと、みことばから確信を持つことができます。そのときにこそ私たちは、「よくやった忠実なしもべよ。」との主のことばを聞くことができるのです。そんな揺るがない喜びが待っているのなら、きょうという日を主のために歩んでいきましょう。キリストの福音をすべての人に語り続けて、だれも罪に惑わされてかたくなにならないように互いに励まし合って、神の家族としてともに歩み続けていきましょう。